

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K05	氏名	上原 麻野
研究主題 —副主題—	文学における語りと象徴に関わる〈問い〉		
所属校	墨田区立柳島小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>2002 年 PISA 調査で、文学的文章「贈り物」の問い 7 における日本人の無回答率が非常に高かった。OECD の全体平均の無回答率が 20.8%なのに対し、日本は 40.7%であった。この設問は、作品の象徴するもの、暗示するものを捉え、自分なりの根拠ある解釈を表現するという力を求めている。このような点について、具体的な学習指導が十分にはなされていなかった面がある。</p> <p>これまで、文学教材の読みでは、物語の設定、登場人物の行動や会話、人物相互の関係、情景描写、視点などの様々な「読みの観点」を提示して読みを進める学習指導、あるいは、学習者の気付きから観点を起こして読みを進める学習指導がなされてきた。そして読みは多くの場合、登場人物の気持ちに迫っていく形で進められてきた。しかし、象徴は明確な観点として指導されてこなかった。また、読みの形成に重点が置かれ、交流まで至らないことが多く、自らの読みの再検討が不足し、自分なりの根拠ある解釈を端的に表現するという意味での主題の検討が不十分であった。</p> <p>本実践研究では、小学校第 6 学年を対象に、絵本「くらやみこわいよ」を教材として、読みの交流活動を中核に据えた学習を行う。文学の読みにおける語りと象徴に関わる〈問い〉によって、自分自身のものの考え方や体験と結び付けて象徴や主題を捉え、それを他の学習者と交流することで、「要点駆動の読み」に展開することが可能になる学習デザインを試み、その可能性を検討する。</p>
II 研究の方法	<p>本研究における発問も、松本（2010）「問い」の 5 要件の観点から分析し、語りと象徴に関わる〈問い〉を設定する。</p> <p>問い 1：[語りを問う〈問い〉]</p> <p>「きみは くらやみが こわいのかも しれないね～」からはじまる言葉は語り手の言葉か、くらやみの言葉か、ラズロ自身の言葉か。」</p> <p>問い 2：[象徴に関わる〈問い〉]</p> <p>「くらやみ」とは何を意味しているか。</p> <p>単元は全 3 時間、次のように行った。</p> <p>1 時間目：本文を読み、重要な意味を含む言葉を選ぶ。ミニマルストーリーを考え、班の皆に紹介する。</p> <p>2 時間目：問 1 について考え、交流し、最終的な自分の応えをまとめる。</p> <p>3 時間目：問 2 について考え、交流し、最終的な問 1、2 の応え、ミニマルストーリー、主題を考えまとめる。</p>

	<p>本研究では、学習シート3枚(㊦物語において、重要な意味を含む言葉を一つ選び、その言葉が表す意味を書く+ミニマルストーリー、㊧[問い①語りに関わる問い]の回答+交流+最終的な①の応え、㊨[問い②象徴に関わる問い]の回答+交流+最終的な①②の応え+ミニマルストーリー+主題)、読みの交流の音声記録をデータとして用いる。なお、音声データはICレコーダーに録音したものを一定の書式に沿ってテープ起こしをした。書式は松本(2006)に準ずる。</p>
<p><b>Ⅲ 研究の結果</b></p>	<p>授業中における学習者の会話の分析から、語りと象徴に関わる〈問い〉を組み合わせるにより、質的三層分析から読みの交流が成立していることが明らかになった。以下は、意味的分析においての一部である。</p> <p>学習者Nは、班での交流の中で、自分の読みを探りながら、話合い1における24N「語り手」から最終的に「暗闇」と読んでいた自分の応えを修正した。これは、自分の読みを他者との交流の中で対象化することによってメタレベルで理解できたことを表している。</p> <p>次に、情報駆動、物語内容駆動の読みから要点駆動の読みに展開されているかを確かめていく。以下は、9班の話合いの様相1、2から分析内容と結果の一部である。</p> <p>[話合い1：問い①語りを問う〈問い〉]において自分の読みの根拠や理由を説明する材料が見付からず、テキストの表現や物語の筋に沿った映像化に根拠を求めるIやKRの意見に納得し物語内容駆動の読みで読むに至っていた。しかし、[話合い2：問い②象徴に関わる〈問い〉]によって暗闇の存在意義や暗闇がもつ意味やラズロとの関係を模索していく、物語の要点を捉えた読みが展開されていく様相が見られた。</p> <p>[問い①②]の話合いの中で、他の学習者による「繰り返し」や「言い換え」「矛盾点をもう一度聞く発話」などの機能が働くことで、Nは、IとKRとの話合いをする中で、自分自身の読みをもう一度探り始め、自分の読みを対象化しているのである。学習者Nは、具体と抽象の間を行き来し、「他の学習者の疑問や考えを取り込みながら自分の読みを更新した読みや発話」が展開されたものだと考える。</p>
<p><b>Ⅳ 考察</b></p>	<p>分析から、文学における象徴に着目することは、テキストの読みに一貫性をもたせつつ、解釈の多様性をもたらすことで他者との読みの交流や解釈そのものを推進させることが分かった。さらに、文学の読みにおける語りと象徴に関わる〈問い〉によって、自分自身のものの考え方や体験と結び付けて象徴や主題を捉え、それを他の学習者と交流することで、要点駆動の読みを展開する可能性があるということが分かった。</p> <p>また、学習者の読みが要点駆動へと展開していく要件や、要点駆動の読みを阻害するものについて今後明らかにしていきたい。</p>